

# 昭和23年（1948年）

## 終戦から戦後の激動期

終戦後の数年間は徐々に民主化が進み、教育改革による新制中学校の発足と同時に、益田農林学校は幕を閉じました。

### 終戦から戦後へ

昭和20年終戦の直前は、開墾や農家へ勤労奉仕などの作業を行うなどの軍事教練や農場での作業が多くなり、教科の学習が少なくなっていました。8月15日の午後、萩原の街中へ行くと、多くの人々がラジオの前に集まり終戦の放送を聞いていたそうです。

終戦後、教育改革の小学校6年、中学校3年、高校3年の六三三制が導入され、新制高校が発足しました。この教育改革に伴い昭和23年4月、益田農林学校は幕を閉じ、益田高等学校が始まりました。



益田農林学校に入学した昭和20年は、『一億総動員』と言われる厳しい戦時体制にあった。

上の兄夫婦は、旧満州へ軍属として配属。次の兄は軍隊へ入隊し、家には両親と姉と弟の5人が残された。そんな中で、休日には農業や炭焼きなどの手伝いをしながらの通学であった。

7月には岐阜市近辺の大空襲があり、戦火が激しくなると、上級生が学徒動員されるなど戦時色は一気に深まっていた。土曜日は終日作業日として、禅昌寺裏山の開墾や農家へ勤労奉仕などの作業に行った。学校では軍事教練や農業での作業が多くなり、教科の学習が少なかったように思う。昭和20年8月15日の終戦の日は、夏休みであったがたまたま登校していた。その日は朝から校庭の隅で、空襲に備えての防空壕掘りをしていた。担当教官から「道具が足りないから、道具を休ませず交代して掘れ。」と言われて掘ったことを今でも思い出す。終戦を知ったのは昼休みに萩原の町へ行ってからで、雑音の多いラジオの前に、多くの人が集まって聞いている異様な光景を見てからである。

終戦についての感慨はあまり覚えていないが、くやしいと言うより戦争が終わってよかったと思うほうが大きかったと思う。

戦時体制一色の抑圧された暗い世の中から解放され、ほっとした気持ちになった。これまでのように夜になると黒色のカーテンをしめ、一灯の電灯に黒い覆いをかけた薄暗い居間に家族が寄り添っての生活から、「明るい電灯の部屋での生活ができる」という素朴な気持ちからだと思う。

下校風景(農林坂)



戦後の益農時代については、予科練帰りの生徒と学習するなど徐々に民主化が進む中で、ザラ紙にガリ版刷りの『益農タイムス』の発行に関わったり、益農の卒業記念アルバム編集に携わっていたことなどが思い出される。

また、教育改革の六三三制の導入により、新制中学校の発足に続いて、昭和23年4月、益田農林学校はそのまま益田高等学校となり、同時に学区制の実施により斐太中学校などの生徒も加わった高校の三年生へ編入した。

今から思うと、学校の学習のことはあまり覚えておらず、本業以外のこと熱を入れ過ぎたような気がする。しかし、戦中・戦後の激動期の四年間に学んだことや体験によって養われたことは、私のその後の生活の支えとなつて生かされていると言える。

また、現在も続いている強い絆で結ばれた級友との友情は、今後も大事にしていきたいと思っている。

今村茂男「80周年記念誌」より